

NEWS 港湾ニュース

■ 江良漁港(松前町)蓄養施設の完成報告

函館開発建設部 築港課

1. 江良漁港の概要

第3種江良漁港は、北海道渡島半島の南西部日本海側に位置し、周辺海域で操業する道内外のイカ釣り漁業及びマグロ延縄等の沿岸漁業の生産拠点として役割を担っています。

江良漁港が所在する松前町は、かつてはニシン漁で賑わいを呈し、その後は明治末期頃からイカ漁が代わって営まれてきました。しかし、近年の漁業資源の減少傾向から、地元では町内13の港の役割及び流通体系が見直され、蓄養機能の強化及び鮮度保持対策による付加価値化向上・ブランド化の推進による水産振興を図ることとしています。

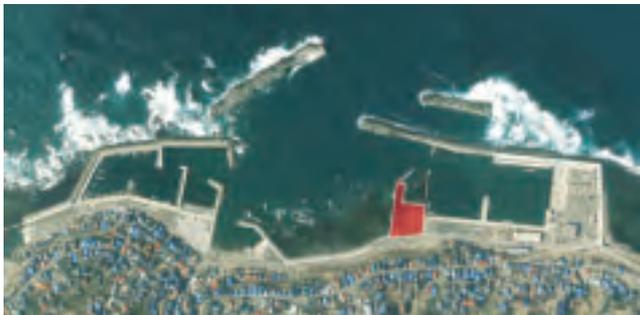


写真1 江良漁港全景写真と蓄養施設の位置

2. 漁業情勢の課題と整備目的

近年漁獲量が減少する中、地元漁協では自主的な禁漁区や禁漁期間の設定、アワビやヒラメの放流事業、漁獲物流通と漁業経営の安定を目指した陸上によるタコの蓄養事業等、「獲る漁業からつくり育てる漁業」に積極的に取り組んでいます。

しかし、江良漁港の背後用地が狭く少量しか蓄養出来ないことに加え、温度管理等によるコスト高により、蓄養魚種・量の増加態勢が難しい状況でした。特に、ウニに関しては平成21年4月にオープンした町内の道の駅で、加工ウニの販売増加に対応するべく漁協加工場を操業開始しましたが、時化等による漁獲の不安定により、休業を余儀なくする等の非効率な稼働状況となっていました。

そのため、効率的で採算性の高い海上での蓄養事業への転換を促進し、従来の栽培漁業や資源管理施策と連携した蓄養施設の強化を図ることで、出荷調整による安定的な水産物供給態勢の確立と集約化による漁業活動の効率化を目指すこととしました。



写真2 江良漁港蓄養施設の全景

3. 蓄養施設の概要

本施設は、生け簀(4m×4m)12基の設置が可能な栈橋構造となっており、取り扱う魚種は主にウニ、アワビ、タコ、ヤリイカを計画しています。蓄養利用する漁船の多くが0～3tの小型漁船であることから、生け簀スペースの2カ所に1カ所を低天端として作業環境の改善を図っています。



写真3 蓄養施設における低天端状況

また、蓄養施設の利用に伴い生け簀底面に糞や浮泥類等が堆積され蓄養水域の水質悪化が懸念されることから、蓄養前面泊地の水深を生け簀底面より深くすることで、波の流れにより堆積物を泊地へ拡散させ、蓄養水域の水質保全効果を図っています。



図1 蓄養水域の水質保全イメージ

4. 今後の取組

供用後の蓄養施設では、漁獲物の出荷調整が可能となり、魚価の安定化が図られます。ウニについては、これまで海象条件により出漁できず不安定な出荷状況が解消され、安定的な加工場の稼働と連携して生産収入の確保が可能となります。さらには、殻付きウニとしての製品販売や加工品として販売された場合の二次的波及効果（付加価値）は非常に大きなものとなり、地域水産業の経済効果として寄与することが期待されます。